



思い出

寂れた町から少しはなれた場所に小さな古い家がありました。
今日も、その窓辺には揺り椅子に起きているのか、
眠っているのかさえ解らないお婆さんが座っていました。
そして、その膝の上には灰色に顔と尾だけが茶色の猫が丸くなっているのです。
雨が降れば室内の暖かな場所で、
今日のように日差しが気持ちの良い日は必ず窓際に一人と一匹はいました。
お婆さんの体調が良い日には、小さな庭で
たくさん、たくさん、植えられた木々の手入れをしています。
小さな庭には年中何かの花が咲いていて
今は小さな薔薇が白い花をつけていました。
白い桜、白いライラック、白い桔梗
お婆さんの庭には白い花しかありません。

「こんな日だったな。覚えているか、ほら白と黒のブチ猫だった。
お前の皺くちゃの小さな手に乗るくらい小さくてさ。
冷たくて、凍えきっていて、オレだって抱いて暖めたんだ。
思い出したかい？
お前は必死になって眠る事さえしないでミルクを飲ませてた。
ずっと泣き続けていた声が静かになったとき、お前はさ……
やっと眠ってくれた……なんていうものだからオレは何も言えなかった。
暖かくて、もう安心していいんだって、精一杯に飲み込みたくても
……足りない量しか飲めなかったアイツはさ。
本当に眠ってしまったんだ。お前に感謝する事さえなかったさ。
だってアイツは小さくて、泣いてばかりで、
凍えて死に掛けていたのに暖かくなっただけなんだ。
安心しただけなんだ。
そうしたら、あんな小さな命は旅立つんだって教えてやれなかったよ。
気付いたお前が声を出さずに泣くのを知っているからさ。
いつも、同じことを言いながら泣くんだ。
オレは知っている」

眠そうに細められた青い瞳で見つめてくる猫は
ヒゲをヒクヒクさせて語ります。

「いつもいつも、忘れないようにと白い花を植えて……

オレは知っているんだぜ？

お前は解らなくなっているはずなんだ。

何十という命を見送った。

犬、猫、小鳥、あげくには誰かが傷つけた小さな蛇まで拾ってきて手当てして、眠りもしないで助けようとするお前の代わりにオレなりに力を貸したつもりなんだ。

いくつもの小さな連中がオレより後に来たくせに先に土に帰っていく。

オレは見ていた。お前が何度も泣いているのをね」

猫の言葉を聞いてお婆さんは、少し困ったように笑います。

その年老いても色あせる事の無い蒼い瞳に出会ったときのことさえ

彼女は覚えているのだけれど、

猫の言うように僅かな間しか居ないで旅立った子の事は忘れているのです。

お婆さんは、それほど多くの命を見送ってきたのです。

今も忘れていたブチ猫の眠っているような顔を思い出してしまって胸が痛みます。

語りかけるつもりもなく独り言のように言葉は自然と零れて出ました。

「かえってこないねえ」

「お前は何度も同じことを言う。

旅立ったものに別れの言葉を言わない。

もう一度、この家に帰って来いという。冷たくなった身体を抱きしめて涙だけ流すんだ」

「だって、せっかく生まれてきたのに笑うことさえしないまま

逝ってしまっては哀しいじゃあないか。

暖かくて、安心できる場所で眠れる方がいいだろ？」

「フン！」

蒼い目がスウと細められて、お婆さんを睨みつけます。

「相変わらずプライドの高い子だこと」

「うるさい。いい加減、オレの小さいときの写真なんか飾るのを止めろよ」

壁にかけられたままのセピア色した写真を睨みつけて

蒼い眼の猫は冷たく、けれど少し照れくさそうに言葉を紡ぎました。

猫は過去の傷を思い出させてしまってお婆さんが悲しそうにすることを

本当は悲しいと思っているのです。

決して意地悪を言いたいわけではないのに暖かな日差しのせいで

年老いた猫はお婆さんを傷つけてしまって話題を変えてしまいたかったのです。

「だって多いときは何十匹と居たウチの猫をまとめあげたボスの幼少の姿だよ。
最初に首に付けさせてくれたのは白銀のブレスレットだったねえ。
他のものなら嫌がるくせに高価な金属のものを好んだものだよ」
「オレに似合うものじゃないとイヤだっただけだ」
「みんなが抱いていく綺麗な仔猫なのに、誰も連れて帰ろうとしない。
鳴き声をあげて歩く姿を見て哀しくてね」

そう暖かな日でした。

お婆さんは犬の散歩の途中で、この蒼い瞳の猫に出会いました。

「オレには母さんが居た」

「だから、あれは犬なんだよ？」

連れ帰った仔猫の世話をしたのは連れ帰るのを見ていた犬でした。

かいがいしく世話をして実の母子のようでした。

どんな仔猫も、仔犬も、その犬が抱いて暖めて世話をしたのです。

けれど、その犬も年老いて逝ってしまったのです。

居なくなった母の跡を継ぐように

蒼い眼の猫は同じように仔猫も仔犬も抱いて暖めるのです。

「オレを育ててくれた母さんだ。立派なボスだったじゃないか。

だからオレは見習う事にしたのさ。

母さんのように泣くお前のそばに居ようって。帰りを待つお前に付き合っているのさ」

「みんな逝ってしまうのかねえ。アタシを置き去りにして」

「お前の手の中で人の温かさを覚えたヤツは多いと思うよ。オレは違うけど」

邪魔臭そうに青い目は閉じられて、猫は丸くなります。

その背中を撫でながら、お婆さんは忘れてしまっていた命のことを思い出して……

また願うのでした。

「早くかえっておいで。

暖かな寝床も、たっぷりのご飯も、綺麗な飲み水も、

いつだって用意してあるんだから」

そんな呟きさえ聞こえていないかのように青い目は閉じたままです。

お婆さんは部屋の奥に仕舞われたままの毛布を虫干ししようと思っていました。

暖かで、柔らかな毛布で迎えてあげたかったのです。

いつか、いつか、この小さな家の中で駆け回る姿を見られると信じるお婆さんに猫は何も言いませんでした。

逝ってしまったものは帰ってなんか来ないと、そんな言葉は本当は解っているはずだと猫は知っていたのです。

だからお婆さんは涙も流さずに泣いて見送るのだと知っているのです。

夏の雨

まだ暗く雨の降る朝のことでした。

雨音に混じって聞きたくない声が聞こえてくるのに気付いた猫は
蒼い瞳を細く開け、すぐ横で眠っているお婆さんの寝顔を確認めます。

— フン。寝ていればいいんだ。オレは何も聞いてない —

そう思い込もうとしても猫の耳にはハッキリと聞こえるのです。

このまま放っておけば声は聞こえなくなるでしょう。

けれど聞こえている声の持ち主を

お婆さんに見つからないようにする事はできません。

やがて見つけたとき、どんな顔をするのかと思うと猫は酷く悲しくなりました。

「しかたがないな」

柔らかで暖かなお婆さんの寝床から抜け出すと足音も立てずに
猫は窓から玄関の辺りを、声のするほうを見ました。

もう何度も、何度も見てきた光景です。

濡れた段ボール箱が置き去りにされているのです。

「せめて天気の良い日にしてくれたらいいのに」

そういう日だと人目があることくらい老猫は知っています。

置き去りにする人たちは誰にも見られたくないのだと猫は知っているのです。

だから雨降りの日に置いていく……

まだ暗い時間に置いていくのだと何度も、何度も見てきた老猫は解っています。

一生懸命に泣く声は母を呼ぶ声です。

「オレには母さんがいたんだ」

老猫は一人呟いて諦めたように寝床に戻りました。

まだ眠るお婆さんの頬に前足を押し付けます。

眠りの浅いお婆さんは猫の行動ですべてが解ってしまいます。

聞こえにくくなった耳でも起こされてしまえば、

雨音より先に聞こえるのが泣き声です。

「誰がかえってきたのだろうねえ」

「そうじゃあない。誰かが違うヤツを置いて行っただけなんだ」

お婆さんが慌てて上着を羽織る間も猫はイライラとしていました。

すっかり弱った足でも急いで外に出ようとしているので

猫は棚の上から見ていることにして外には出ませんでした。

出なくてもわかっています。

そう、猫の予想通り濡れた段ボールを重そうに

玄関まで運んできたお婆さんが見えていました。

「あらあら、濡れて寒そうだこと」

濡れた段ボールの中から小さな仔猫が三匹、

お婆さんの用意した毛布に包まれます。

「このままじゃあダメね。ストーブを仕舞わなくて良かったわ」

「重くて持ち上がらないって、ここ数年はしまっていないじゃないか」

「おや、お前だって雨の日には火をつけろというじゃないの」

「フン！オレはいいんだ」

蒼い目の猫の言葉は照れ隠しのようでした。

お婆さんは小さな毛玉のような生き物を丁寧にタオルで拭いて

ストーブに火をつけます。

行火と毛布を入れた古いバスケットに小さな仔猫たちを移しかえて

お婆さんは少しだけ落ち着きます。

「さて、暖かいものを飲ませたいから見ていておくれ」

「オレがか？」

「見ていてくれるでしょう？」

嫌がるような顔をしてても蒼い目はバスケットの中を見つめているのです。

お婆さんが立ち上がると猫は

バスケットの中に入り込んで仔猫たちを抱いて暖めてやります。

泣き喚く仔猫たちは目も見えていなくて、

傍に来た老猫を母猫と勘違いしているようです。

お腹の下に潜り込もうとするのを押さえつけて顔を舐めてやります。

そうして三匹の顔を舐めているとお婆さんが戻ってきて微笑んでいました。

「やはり頼りになるねえ」

「フン」

そっぽを向いても老猫はバスケットから出ませんでした。

フルフルと震えている小さな命は何度も経験してきた事なのです。

ふと窓の外を見れば濡れて萎れた朝顔の花が水滴を滴らせていました。

「なあ……今は夏っていうんだろう？」

「そうだねえ。もう七月も終わりだから梅雨も明けると思うけれども」

手際よく弱った仔猫に暖かなミルクを少しずつ、少しずつ飲ませながらお婆さんは猫に相槌を打ちました。

こんなに雨が降っていても夏なのです。

それでもストーブをつけて暖めていても寒いのだと

泣き喚く仔猫たちは訴えています。

フルフルフル……震える身体が老猫のお腹の下にもぐりこもうとします。

ミルクだらけの顔を丁寧に舐めてから別の仔猫を舐めてやります。

老猫には暑いくらいのバスケットの中で仔猫たちは震え続けていました。

「こいつら置いていったの誰だろう」

「何を言っているんだい。その蒼い目はなんでもお見通しなんだろう？」

それは地面に箱入りで落ちていただけじゃあないか。

きっと旅立った誰かがウチに帰ってきたんだよ」

「ああ、確かに昨日の晩まで無かった箱が朝には落ちていたけどさ！」

その先を言おうとして猫はやめることにしました。

蒼い目は解っています。

帰ってくるわけなどないと理解しながら

言い続ける理由も知っているから言えなくなるのです。

キッチンタイマーをセットしたり、久しぶりに魔法瓶にお湯をたっぷり用意してお婆さんは忙しく動き回っています。

まだミィミィと泣き続ける声を聞きながら
青い眼は仔猫たちの身体を見たくありませんでした。
知っているのです。

こんなことは、もう数え切れないほど行われてきたのです。
今はお婆さんと老猫だけが暮らす家は、かつてたくさんの犬や猫がいたのです。
震えてやってきた彼らは今は居ないのです。

「これが鳴ったら教えておくれ」

耳が遠くなったお婆さんはキッチンタイマーの音が聞こえない事があります。
けれど猫に頼んでおけば大丈夫だと信じていました。
そうして疲れた身体を休めるかのように古いバスケットの傍で
お婆さんは自分用の毛布に包まれます。

「こんな所で寝ていたら病気になってしまうぞ」

「大丈夫、お前が居てくれるから大丈夫だよ」

お婆さんの言葉に猫は悔しくてなりませんでした。
フルフルと震え続ける仔猫たちは酷く痩せていてミルクも飲めていなかったのです。

— きっと喉が痛いんだ。

オレは、また大嫌いな医者に連れて行かれるんだらうな。

生きようとしてくれ。オレだって不死じゃあないんだ。

誰でもいい……オレのかわりにアイツの傍で居てやってくれ —

もう忘れてしまったけれど、壁に貼られた仔猫の写真は
大きな犬に寄り添われています。

あの大きな犬は間違いなく老猫の記憶にある母さんなのです。

お婆さんが泣く事を一番イヤだと言っていた

母親の声を猫は覚えているのです。

蒼い目がみるもの

翌日も、その翌日も、お婆さんと猫は
一時間ごとになるタイマーを合図に仔猫たちにミルクを与えます。
お婆さん特製の栄養剤が入った甘い甘いミルクです。

「いっちゃんは頑張ったね。さんちゃん、もう少しのめないかしら」

三匹の仔猫に大きさを一、二、三、と愛称を付けて呼びながら
飲んだミルクの量を見てお婆さんは嘆きます。
蒼い目の猫は何も言わずにミルクの付いた仔猫を舐めていました。
もう泣き声さえ滅多に出さなくなった仔猫たちは相変わらず震えているのです。
雨がやんで、暑い日差しの差し込む窓辺で
行火と毛布に包まれて仔猫たちは震え続けています。

「体温が上がらないんだ」

「お前が暖めてくれているのだから大丈夫」

けれど、その日の夕食の支度の中に
一番ちいさな仔猫が息をすることをやめてしまいました。

「くそお！」

また涙を見なければならぬと覚悟したのに、お婆さんは泣きませんでした。

「お疲れ様、よく頑張ったねえ……今度は笑顔を見せに帰っておいでよ」

お婆さんは電話をして、小さな小さな仔猫のためのお葬式をお願いしていました。

「まだだよ、まだ生きているじゃあないか」

けれど深夜には一番大きな仔猫がピクリとも動かなくなったのです。

一番ミルクも飲んでいただけにお婆さんは期待してしまっていたのでしょう。
動かなくなった小さな毛の塊を抱きながら
囁くように別れの言葉を呟いていました。

「苦しかっただろう。もう寒くないからね……今度来た時は笑っておくれ」

「帰ってくる前に、お前が病気になっちゃうだろ！」

「大丈夫、お前の蒼い目があるから大丈夫だよ」

頬擦りされて、猫はお婆さんの頬が濡れている事に気付きました。

また……また声も出さずに泣いているのだと解って

猫は悔しくて仕方がありませんでした。

二つの小さなお葬式を終えて、暑い日差しの中暑いバスケットに包まりながら

蒼い目の老猫は気がかりでなりません。

お婆さんは仔猫のことに一生懸命で食事さえとっていませんでした。

願いを託す

けれど、そのお婆さんは小さな仔猫を抱き上げて笑います。

「目の色が違うね、この子は蒼い目になるよ」

最後に残った仔猫です。

暑い日差しの中、お婆さんは二匹の蒼い目の猫をお医者に連れて行くことにしました。

「もう大丈夫だろう？」

「いいから！オレの腹を吸うなって教えてやってくれえ」

体温が上がった仔猫は少しずつミルクも飲んでくれています。お腹がすくと蒼い目の老猫に甘えていくのです。みいみいと鳴いて甘えてくる仔猫に老猫は願いを託しました。

「生きろよ……アイツを泣かせちゃダメだ」

小さな小さな庭に白いコスモスの鉢が二つ風に揺れています。暑い日差しも少し和らいで、静かだった小さな家は少しだけ賑やかになりました。

「こら！そこはオレが寝るんだ」

老猫の声にビクリとしたのも束の間に灰色の仔猫が飛びかかります。

「オレの母さんもこんな気分だったのかな」

「だから、あれは犬なんだから……」

「それでもオレの母さんだ」

「この子も、いつか同じような事を言い出すのかしらねえ」

疲れた老猫を庇うようにお婆さんは仔猫を膝に抱いて遊んでやっています。まだまだ小さな命は何も知らずに生きることが嬉しいのだといわんばかりに笑っていました。

あおい目

<http://p.booklog.jp/book/26078>

著者：猫屋雑猫

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nekoyazathuneko/profile>

発行所：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26078>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26078>